

大島みらい新聞 No.17

2014年8月25日発行



ごあいさつ～No.17の発行にあたって～

白幡幸英さん（カフェオーナー）

第17回みらいを考える会では「大島に温浴施設をつくろう！」というテーマで熱い意見交換が行われ、大島の復興を福祉や観光の面から考えていきました。また、「エコ&アート2014」では小田の浜に竹の休憩所が設置され、学生と島の子供たちが共に竹の水鉄砲づくりを楽しんでいました。この休憩所は現在、浜の背後地の土地に移設されています。この「竹の休憩所」の今後の展開が楽しみです。これからの大島の復興を考えていく上で、若い人たちが女性のパワーがもっと必要だと思います。大島みらいチームの先生方と学生たちの今後の活動に期待しています。



エコ&アートプロジェクト 2014

大島アイランドフェスにて、竹の休憩所出現

天候状態が心配されていましたが、8月9日、小田の浜で大島アイランドフェスティバルが無事に開催されました。子ども達は海でのアクティビティや豊かな生態系の観察など、このイベントを通して海との関わり方を学んでいました。このイベントで我々大島みらいチームは、エコ&アートプロジェクト2014として、こども達や島の方々が一休みできる竹の休憩所の製作に取り組みました。

8月4日の早朝から竹の切り出しを始め、海友会の方々には竹を紐で固定するた

めのロープワークを教えてくださいました。

作業の中で、竹には一本一本癖があったり、節には向きがあって紐がよく引っかかる方向があることなど、竹の性質を学びながら4日間の製作期間を終え、本番を迎えることができました。イベント当日は竹を使って子ども達と水鉄砲をつくるワークショップを行い、竹の休憩所は子ども達だけでなく、大人の方々の休憩所としても活用していただくことができました。イベント終了後は、島民の方のご厚意で、浜近くの空き地を一時的な移設場所にお貸しいた

できました。今後はメンテナンスをしながらか、恒常的に活用してもらえない方法がないかどうか、検討してみたいと思います。今後、この竹の休憩所が新たな島の憩いの場所となれば良いと思います。

(神奈川大学 4年 立花洋治)



第17回大島のみらいを考える会

テーマ

大島に温浴施設をつくろう！

—豊かな自然や風土を活かした健康の島づくり—

話し手

福岡孝則（神戸大学 持続的住環境創成講座）

—大島に温浴施設をつくろう！

今回の大島のみらいを考える会では、島民アンケート結果でも多くの方が望んでいた温浴施設による観光復興の可能性を取り上げました。大島は国交省離島振興課が1994年に提唱した「アイランドセラピー構想—島の個性豊かな自然や風土を活かした新しい健康保養地づくり」のモデル地域に指定され、海水温浴施設の構想もありましたが、実現しなかったという経緯があります。今回、大島と同時期にモデル地域に指定された愛媛県弓削島（ゆげじま）と大三島（おおみしま）の二つの島の温浴施設を視察してきました。

—弓削島の海水温浴施設「潮の湯」と大三島の「マーレ・グラッシア」

弓削島と大三島では国交省のコミュニティアイランド推進事業を活用して温浴施設の整備を行いました。人口約2000人の弓削島「潮の湯」は、近くの瀬戸内海から

取水する完全な海水温浴施設で、水着を着用して運動療法プールや屋外海水風呂などを利用者が時間をかけて運動しながら回遊する仕組みとなっています。実際に海水には鎮静作用や血行促進の効果があり、健康増進に欠かせない場所になっているそうです。

一方、人口4200人の大三島の「マーレ・グラッシア」は規模も大きく、島民や周辺住民の日常的な利用の多い温浴施設で、地元の農産物直売所や交流スペース、健康増進スペースなどを併設したコミュニティ施設となっているのが特徴です。地元の家族連れやスポーツチームの子供たちなど、多くの人々で賑わっているのが印象的でした。

—大島の観光復興と温浴施設

—今後の可能性

アイランドセラピーの本来の目的とは、島の個性豊かな自然環境の中で適切な運動

を行い、島の豊かな食材や人々・地域文化とふれあうことで健康を取り戻すことです。大島のもつ潜在的な可能性が高く評価されながら実現を見なかった温浴施設、架橋後の観光復興を見据えて、改めてその活かし方を皆で議論する時が来ているのではないのでしょうか。



海水運動療法プール



弓削島「潮の湯」

講演を終えて—島の方々とのディスカッション

【架橋と観光について】

—架橋によって多くの観光客が大島に訪れることが予想されます。その時、どういうふうに関内時間で時間を過ごしてもらえるのか？観光戦略を考えるのは今だと思います。（福岡）

—大島は気仙沼の復興を引っ張っていく観光資源を持っていると思います。ここを魅力ある場所にしないと、全国とか東北の他の地域から人を集められないのではないかと。（長峯）

【施設の利用者について】

—その施設を誰のためにやるかということが、まだよくわからない。（島民）

—施設を作ることを考えた時に、島の方が利用する施設として作るのか、観光客に利用される施設として作るのか、あるいはその両方を兼ね揃えた施設を作るのかということを考える必要がありますね。（福岡）

【施設の財源について】

—財源はどうするのでしょうか。（島民）
—国からの財源と民間の資金を組み合わせる形で施設を運営するPPPという仕組みもあります。

民間だけでは回らない部分もあります。行政を巻きこむ色々な資金調達方法があるなかでどれを選択していくのか。実際に資金が集められたら、それを誰がどのように運用・管理していくのかを考える必要もあります。（長峯）

【癒しの日について】

—「癒しの日」では、最初は大島を散歩するみたいなのもやりましたし、サンドゴルフという、砂の上でゴルフもしました。温浴施設ではありませんが、お湯に海藻を入れて入ったこともありました。（島民）

—今でもやられていますか。（長峯）

—震災後はやっていません。施設をつくる話もありましたが、いつの間になくなってしまいました。（島民）

—癒しの日がどんな日なのかということが浸透しないうちに終わってしまった感じがします。（島民）

—やっぱり目標があいまいだったことがよくなかったかと。何に向かって癒しの日をするのかを明確にすればよかったのかと思います。

発言者：福岡・長峯（みらいチーム）、島民の方々

—癒しの日を復活させることも考えられますか。（長峯）

—癒しの日の予算は昨年からついています。再開に向けて考える時期なのかもしれない。（島民）
—大島を「癒しの島」にするのか「観光の島」にするのか。昨年島民の方々が採択された復興宣言を基に、島のヴィジョンを共に考えていきたいと思っています。（長峯）

【大島と温泉】

—小さいときには小田の浜に温泉があったんですよね。あそこは思い出の場所です。（島民）

—温泉だけだと経営的に難しいですが、飲食など、周辺で色々できると良いと思います。ウェルカムターミナルや亀山のロープウェイと一体で考えれば経営的には色々な可能性が見えてきますね。（福岡）

—私も温泉好きですから、500円くらい払って温泉に入って、風呂の後でラーメン食べたりとか、そういうのって大島に似合うなと思ったりします。（島民）

連載コラム
大島人
OSHIMA-JIN

大島で生きる人のここだけのななし

第8回

村上 広志さん

むらかみ ひろし

おばか隊 隊長



おばか隊って？

気仙沼市大島に、震災後まもなく島の有志が集まってできた地元ボランティアグループがあります。それが、「おばか隊」です。自分たちも辛い中で復興作業を行い「バカでなければやっていられない」と言われるなかで、島の方々にこの愛称で親しまれるようになりました。今回はおばか隊の村上広志さんにインタビューをさせていただきました。

取材：関目、樋口、時山

今言いたいことは、色々な悩みや境遇の島民の本音を汲み取って欲しいということ。

—震災直後の活動について教えてください。

大島は津波被害だけでなく山火事の被害も出ました。フェリー乗り場まで広がる火は「大島は終わる」と思わせるほどの凄まじさでした。しかし、声をかけたわけでもないのに消火活動のために多くの人が集まったんです。助けが来ないことはわかっていただけ、本当の意味で島民の気持ちがひとつになった瞬間だったと思います。

おばか隊はそんな「思いだけで集まった人たち」から始まりました。フェリーが動かない間、毎日使える養殖船を使い、本島と行き来して物資の供給を行ったりしました。フェリーが動くようになって島を出て行く人もいましたが、今度はボランティアの人たちが入ってくるようになりました。おばか隊はそのボランティアの人たちの受け皿となり、取りまとめを行いました。がれきの分別などを苦戦しながらもやり遂げていく中で、どんな被災地にも私たちのような受け皿が必要だと感じるようになりました。

—おばか隊を通してたくさんの人たちが繋がったのですか。

おばか隊があることによって多くの人達と繋がれたことは嬉しいですが、今度は島民の方々と距離が縮まればいいと思っています。

—震災から4年目を迎えて、どのような心境ですか。

仮設住宅での長い生活や進まない高台移転の話などで島の人たちのパワーが一日一日削られていくのを感じます。でも、こんな時だからこそ、今一番必要だと思うのは「外の空気を入れること」だと思っています。やっぱり、外から人が入ってくることによって島の空気が変わるんです。だからもっともっと外からの声と空気を入れて欲しい。

—私たちのような学生が大島に来ることについてどう思いますか。

はじめは言葉にとらわれ過ぎて気持ちが伝わってこないこともあり、戸惑いました。でも中には熱い気持ちを持った学生もいて、復興に協力してくれるのは本当に嬉しいと思っています。島を訪れる学生やボランティアの人たちには形はどうであれ、島の人たちの気持ちを感じとって欲しいと思います。本当に辛い人ほど明るく振舞ったりしているから、本音の部分を探ってもらって、今一番必要な提案や活動をして欲しいと思います。

今言いたいことは、色々な悩みや境遇の島民の本音を汲み取って欲しいということ。それを学生や社会人の方々に被災地から発信していただけたら嬉しいです。

島外編
大島人
OSHIMA-JIN

大島で生きる人のここだけのななし

たなか たつみ

田中 達美

江田島市長



広島湾に位置し、瀬戸内海で4番目に大きな島・江田島。大島の皆さんは、フェリー「ドリームのうみ」で、大島と江田島市の繋がりをご存知かと思いますが、今回は大島人「島外編」として、2014年6月23日に田中達美江田島市長を訪問し、インタビューした内容をご紹介します。

取材：長峯純一（みらいチーム代表）、吉本響

大島へ渡った、江田島市のフェリー「ドリームのうみ」

—広島県江田島市の「ドリームのうみ」が、どのような経緯ではるばる大島へと無償貸与されることになったのでしょうか。

田中市長：3月11日、私は江田島市役所におり、テレビで地震と津波を知りました。最初、何が起きているのか、場所がどこなのかもよく分からず、ただただ映像に見入っておりました。すると、大島の桟橋と陸へ押し上げられた旅客船の映像が映し出されました。その時に船を必要としている地域があるはずと思いました。当時、江田島市には船が二隻係留されており、この船を提供しようと震災3日後に情報提供をしました。連絡があったのは3月の終わり。気仙沼市長さんからです。役所では、議会やらいろいろと手続きがありますが、あの時はそんなに時間をかけていられないことが明らかだったので、二つ返事で4月中旬に無償貸与を決定しました。

—決定してからすぐに船は大島へ出発したのでしょうか。

田中市長：いいえ、それは不可能なんです。こちらの瀬戸内海は波も穏やかなため、太平洋を行き交う船とは設備が違ふんです。「ドリームのうみ」に足りない設備などを大急ぎで準備しました。県

庁などからも支援物資を運んで欲しいとの依頼がありました。しかし荷物を積んではいけないという規制にひっかかって、それでもできません。けれど、大島の人たちにお聞きすると、調味料が欲しいとのことで、絶対に持っていかうと思いました。心配する市職員もおりましたが、友人への個人的なお土産ということにして、夜中にそーっと積みこみました。ところが、気仙沼市に到着したときに、江田島から救援物資が来た、と新聞に出てしまいました。多少の批判は受けましたが、被災地の方々が喜んでくださったのなら、あれでよかったんだなと思います。

(来月号に続きます！)



なにがあるでしょう。



大島のエネルギー資源って

第18回大島の未来を考える会

テーマ：「大島でエネルギーの地産地消が可能か考えてみよう」

講師：横山 孝雄 氏

日本社会が抱える問題に化石燃料（石油）への依存があります。そうした中で、周りの自然と向き合いながら、化石燃料からの脱皮を図ろうとしている地域が出てきています。太陽光、小水力、バイオマス、風力、波力・・・実は地方は自然資本の宝庫とも言え、それをエネルギー源に生かすことが地域資源の維持・保全にもつながります。大島復興と持続可能社会をつくるため、エネルギーの地産地消について考えてみましょう。

講師紹介：横山氏は、バイオマスエネルギーをはじめとして地域エネルギー政策、そして森林管理手法に詳しい専門家です。兵庫県を主たるフィールドに、徳島県や北海道の自治体のエネルギービジョンやバイオマス産業都市構想の策定にも関わってきました。「あわじ環境未来島特区」のプロジェクトにも関わっており、当日は、洲本市（旧五色町）の漁業協同組合が取り組んでいる洋上風力発電の話も聞けるかと思っています。

日時 | 2014年9月20(土)
13:30～15:30

会場 | 大島開発総合センター2階

共催 | 気仙沼大島みらいチーム

大島地区自治会連絡協議会

参加
無料

予約
不要

是非ご参加ください

大島宣言Tシャツ販売中！
大島宣言Tシャツをお求めの方は大島公民館でお訪ねください。
S/M/L/XL 各 ¥1000円-

大島みらい新聞 No.17 2014年8月25日発行

企画・制作・発行 気仙沼大島みらいチーム
編集長 長峯純一（関西学院大学）
協力 大島地区自治会連絡協議会
写真・デザイン 気仙沼みらい計画大島チーム
小林達矢、楠目晃大、樋口徹也、古永家由記、立花洋治、清野喜代和、時山諒、吉本響
お問い合わせ 小林達矢
Mail:jiro.isogai0246@gmail.com